

茨木市立天王中学校 全国学力・学習状況調査分析結果

令和5年 10月作成

【今年度の結果と取組みについて】

〇●国語●〇

(領域ごと)

①言葉の特徴や使い方に関する事項	概ね良好な結果であった
②情報の扱い方に関する事項	概ね良好な結果であった
③我が国の言語文化に関する事項	概ね良好な結果であった
④話すこと・聞くこと	概ね良好な結果であった
③書くこと	良好な結果であった
④読むこと	概ね良好な結果であった

(問題形式)

①選択式	概ね良好な結果であった
②短答式	概ね良好な結果であった
③記述式	概ね良好な結果であった

(無解答率)

概ね良好な結果であった

(その他)

もっとも正答率の高い設問は2ー「事象や行為、心情を表す語句について理解しているかをみる」内容で、もっとも正答率の低い設問は3二「文脈に即して漢字を正しく書くことができるかをみる」内容であった。

また、最も無解答率の高い設問は3四「根拠を明確にして書くことができるかをみる」内容であった。一方で、無解答率の低い設問が多くあり、すべての設問に解答している生徒が多かった。

分析

平均正答率は概ね大阪府や全国平均の正答率と並ぶ結果となった。無解答率は全国平均よりも低く、問題に向き合う意欲が感じられる。昨年度は「書くこと」の正答率がやや低かったが、今年度は「インタビューを読んで、目的に沿って自分の考えをまとめる」問題が全体の2番目に正答率が高かった。また、「書くこと」の領域は良好な結果であった。単元のまとめで作文課題を定期的に出すなど、「書くこと」の取組みの成果であると考えらる。

しかし、無解答率が一番高かった問題も「書くこと」の問題であったため、書くことをあきらめてしまう生徒が一定数いるのも事実である。そのため、授業内で自分の考えをまとめて、表現する活動を単元ごとに積極的に取り入れるなど、書くことを日常から積み重ねていき、書くことへの抵抗をなくしていきたい。

(領域ごと)

- | | |
|---------|-------------|
| ①数と式 | 概ね良好な結果であった |
| ②図形 | 良好な結果であった |
| ③関数 | 概ね良好な結果であった |
| ④データの活用 | 概ね良好な結果であった |

(問題形式)

- | | |
|------|-------------|
| ①選択式 | 概ね良好な結果であった |
| ②短答式 | 概ね良好な結果であった |
| ③記述式 | 概ね良好な結果であった |

(無解答率)

概ね良好な結果であった

(その他)

もっとも正答率の高い設問は6(1)「はじめの数が11のとき、はじめにかける数が2、たす数が3のときの計算結果を求める」であり、もっとも正答率の低い設問は7(2)「2006年～2020年の黄葉日は、1991年～2005年の黄葉日より遅くなっている傾向にあると主張することができる理由を、箱ひげ図の箱に着目して説明する」であった。

また、もっとも無解答率の高い設問は6(3)「はじめの数にかける数がいくつ、たす数がいくつであれば、計算結果はいつでも4の倍数になるかを説明する」であり、もっとも正答率の低い設問は1「-5、0、3、4.7、9の中から自然数を全て選ぶ」と2「 $12(x/4 + y/6)$ を計算する」であった。

分析

平均正答率は概ね大阪府や全国の正答率と並ぶ結果となった。詳細に分析すると、「図形」の領域で平均正答率が全国平均を大きく上回り、それ以外の「数と式」「関数」「データの活用」の領域に関しても全国平均を上回っている。バランス良く学力の定着が見られるが、「データの活用」の領域や「記述式」の形式に対して正答率がやや低いことが分かる。これらの内容は、日常生活と数学のつながりや、そこから読み取れることを数学的に表現する力を問われているため、単なる問題演習にとどまらず、数学的思考を活用する場面設定が必要である。

無解答率はわずかだが全国平均を上回っている。初めて見る内容や、やや複雑な内容の問いに対して粘り強く思考する力が必要であると思われる。目の前の課題と向き合い、自分なりに考えることや、周りと協力しながら課題を解決していくような姿勢を身につけさせたい。

○●英語●○

(領域ごと)

- | | |
|-------|-------------|
| ①聞くこと | 良好な結果であった |
| ②読むこと | 概ね良好な結果であった |
| ③書くこと | 概ね良好な結果であった |

(問題形式)

- | | |
|------|-------------|
| ①選択式 | 概ね良好な結果であった |
| ②短答式 | 概ね良好な結果であった |
| ③記述式 | 概ね良好な結果であった |

(無解答率)

概ね良好な結果であった

(その他)

もっとも正答率の高い設問は1(1)「ある状況を描写する英語を聞き、その内容を最も適切に表している絵を選択する」であり、もっとも正答率の低い設問は10「学校生活(行事や部活動など)の中から紹介したいものを1つ取り上げ、それを説明するまとまりのある文章を書く」であった。

また、もっとも無解答率の高い設問は9(2)「メールの英文を依頼する表現に書き換える」であった。

分析

平均正答率は概ね大阪府や全国の正答率と並ぶ結果となった。詳細に分析すると、「聞くこと」の正答率が全国平均よりも上回っている。「読むこと」「書くこと」については、全国平均より少し上回っていた。「聞くこと」の正答率が良い理由については、授業内で英語を聞く機会が多いことや、タブレット等を活用しながら英語を聞く取組みを増やす授業展開を行っている結果が表れている。

一方で、「学校生活について説明するまとまりのある英文を書く」という設問に対して全国平均と比較して正答率が低く、「メールの英文を依頼する表現に書き換える」という設問に対して無解答率が高いなど、「書く」領域において課題がある。

「聞くこと」「読むこと」の両領域については現在の取組みを継続するとともに、「書くこと」の領域においては、授業の中で生徒が自分の意見や考えをアウトプットする機会をより多く作ることで生徒の英語力を底上げしていく必要がある。

○●英語（話すこと調査）●○

（領域ごと）

- | | |
|---------------|-------------|
| ①「話すこと」(やりとり) | 概ね良好な結果であった |
| ②「話すこと」(発表) | 概ね良好な結果であった |

（問題形式）

- | | |
|-----------|-------------|
| ①口述式(短答式) | 概ね良好な結果であった |
| ②口述式(記述式) | 概ね良好な結果であった |

（無解答率）	良好な結果であった
--------	-----------

（その他）

最も正答率の高い設問は1(4)「動物園でのやり取りの中で、留学生の質問を受け、お土産としてふさわしいものとその理由を伝える」であり、もっとも正答率の低い設問は2「環境問題についてのプレゼンテーションを聞き、話し手の意見に対する自分の考えとその理由を伝える」であった。

また、もっとも無解答率の高い設問は「3 動物園でのやり取りの中で、カンガルーが食べるものについて留学生に質問する」であった。

分析

平均正答率は全国の正答率と並ぶ結果となった。詳細に分析すると、「長い英文を口述する領域」の正答率が全国平均よりも上回っている一方で、「短い内容を口述する領域」については、全国平均よりわずかに下回っていた。また、「無解答率」の割合が全国平均よりも低かった。

本校では日ごろから英語を使う機会を設けており、「自分の考え」を英文で表現する取り組みを行っている。その結果、「長文の口述問題」の正答率が高く、また、日ごろから、「間違ってもいいからとにかく英語を発するように」指導していることが、無解答率の割合が低さにつながっていると考える。

課題としては「短答」形式の口述正答率が低かったことである。質問されたことに対して適切な英語を使って、答えることができるように指導していきたい。

〇●経年比較●〇

全体的な傾向についての分析

無解答率は昨年よりやや上昇しているが、全国平均よりは下回っている。出題された問いに対して考えようとする意欲があると考ええる。正答率は国語、数学ともに昨年よりも高い値となった。

国語では「我が国の言語文化」「読むこと」の領域が、数学では「データの活用」の領域が正答率がやや低い。ため、情報をまとめたり、自分の考えを整理し発表していく等の取組みが必要だと考える。

学力高位層と学力低位層、エンパワー層についての分析

今年度は、国語で低位層の割合が減少し、高位層の割合が増加していることから、基礎学力の定着が進んでいるものと見られる。数学に関しては低位層・高位層の割合がともに増加しており、いわゆる「ふたこぶ」の状態となっている。

高位層の割合は、昨年度よりも大幅に上昇している。しかし、低位層の割合も微増しているため、基礎学力を土台とした応用力や、幅広い視野をもって考える力の育成についての指導、課題に対してより意欲的に取り組めるような工夫が必要である。

〇●取組み●〇

学力向上に関する取組み

1 基礎学力の定着

◎朝読に対する指導

担任も含め全員で読む習慣を身につける。

成果

- ・朝から落ち着いた雰囲気です授業が行えるようになった。
- ・朝読以外の時間でも本を読む習慣が付き、文を読む力や想像力の向上が窺える。

◎学習会の実施

定期考査期間に実施。

成果

誰でも質問がしやすい雰囲気をつくり、学習意欲の向上につながっている。

2 言語活動の充実

授業内において自分自身で考えたことをまとめ発表する機会を設けている。

3 授業方法・内容の工夫と改善

授業開始時に目標と授業の流れの提示をし、授業終わりや単元ごとにふり返りをする時間を設けている。また、タブレットを利用する場面を増やし、生徒の学びの幅を広げている。

4 学校全体としての取組み

◎「チャイムと同時に授業を始める」ことを徹底する。教師がチャイムが鳴ると同時に授業を開始する習慣をつける。

成果

チャイム着席や挨拶、授業の進行やふり返りなど時間にメリハリがついた。結果として、生徒の活動にも余裕が出てきている。

◎校内研究授業

今年度は「教師のタブレットを使った生徒同士の学び合いによる授業」をテーマにおこなった。

成果

活用例を実際に見ることや、研究討議内での講話により、少しずつ授業にタブレットを活用する教員が増えてきている。生徒の学習に効率よく取り入れていきたい。